

## インドネシアの環境問題についての 若干の紹介（3）

——ある東南アジア NGO レポートから——

神 戸 秀 彦

### <ケース・スタディ# 4 インドネシアの NGO にとっての観光 業とオルタナティブ (alternative) >

最近のインドネシアの政府系企業設立のかけ声は、東へ行け!、若い投資家よ、東へ行け!というものである。この言葉は、スマトラとジャワは過去で、カリマンタンが現在、東インドネシアが将来、というものである。そこで、若い（そして古手の）投資家が東へ行く。

一方で、なお開拓者が存在し、潜在的には、国の富の半分が調査もされず、開発もされていないことは良い知らせである。他方で、新しい開発は、西インドネシアで起こったことの繰り返しになるだろうか、それとも良くなるだろうか。

投資家が既に東インドネシアでの開発を始めたところで起こっていることを見た場合、奨励できるようなものはあまりない。ロンボク (Lombok)\* のケースを一例として挙げてみよう。

#### <ロンボクの発見>

この島での大飢饉についてのレポートが国際的に広がることとなった70年

大した抵抗もなく、なすがままに買収されている。貧困によってもまた、彼らは、即時で簡易な金——これがあればメッカへ巡礼にゆき、ハジュ(haj)<sup>\*\*\*</sup>になることができる——の魅惑に極端にとりつかれ易くさせられている(バリ族ヒンドゥー教徒による占領——それはオランダ人のプロテスタントによって引き継がれ、そして現在では比較的世俗的なジャワ人によって引き継がれているのだが——の歴史があるが、ロンボクの人々はほとんどイスラム教徒なのである。ハジュ(haj)を行う人々は、非常に高い社会的地位を享受する)。

外部業者は、土地を得るためには地方や国のエリート達と協力する。州政府は、現在の土地利用またはその住民を顧慮することなく、ホテルや工業、そしてレクリエーションの各地域の境界線の線引きをする。地方のブローカーは、外部の投資者に代わって適切な財産を探す。地方官僚が新規に雇い入れられ、土地所有者に不本意でも取り引きさせるようプレッシャーをかける。人々は、政府が土地を必要としているのだし、かつ売却を拒否することは発展を妨害することになる、と言われる。もし、占有者が所有権の本来の証明書が欠いているときには——それは付与されずにおかれることもある——その土地は、国の財産であるとの承認を求められる。土地の証明書は、土地の価格の50%で土地登記事務所から買い受けることができ、土地の価格は、優良地域では数百倍に増加してきたから、賄賂の調達をすることができるのは投資家のみ、といううわさだ。

時として、センギギ地方のように、財産を取り上げた人々が追放される場合もある。地域に人口が比較的密集しており、あるいはすでに自らの事業を確立していて闘いを挑んだ人々がいる時には(ギリ・トゥラワンガン(Gili Terawang)のように)、もっと微妙で手の込んだ策略が用いられる。地域によっては、村民自身の財産を求めてより良い場所へ移住している村もあるし(ギリ・アイル(Gili Air)のように)、事業の設立を非常に高価なものにするような補償を要求している村もあるし、そして土地の権利を守るための法的手段を通すことを主張し、補償への接近をあくまで否定している村もある(クタ・ビー

代の後半まではロンボクに関心を持ったり、またはその名を知る者すらほとんどいなかった。飢饉は非常に激しいものだったので、バリ人はロンボク州都のマタラム(Mataram)で一袋の米と引き換えに家や庭を買うこともできたのである。農村地方では、多くの人々が死んだ。

飢饉は、むろん、長い干ばつと乾燥した気候、そして南ロンボクの痩せた土地に原因がある。しかし、学生活動家達によれば、ロンボクは実際には自らの地域住民に食料を与えるのに十分な生産をしていたことが明らかである。にもかかわらず、生産された食料の多くは、ジャワの多数の大衆に食料を与えるためにジャワに輸出されたのである。救援の努力を遅らせることとなった不手際と怠慢にもまた責任があるとされた。

1983年の飢饉と地震の結果として、大規模な救援キャンペーンが動員された。外国の援助がロンボクに到着し、島のインフラストラチャーが手当を受けた。このプロセスの中で、その自然資源や観光業の可能性と共に、ロンボクが見いだされ、開発が急激に勢いを増して行ったのである。

観光業は、今やロンボクの経済の最も急激な成長部門であり、人々の生活に非常に大きな影響力を持っている。しかし、ロンボクの人々は、特に農村や漁村の人々は、突然の変化への備えができていなかった。彼らは、ガイドと労働者以外には、観光業の発展に参加する機会は与えられなかったし、多くのケースで既に新しい開発による被害を被っていた。

### <外部業者の手による立ち退き>

ロンボクは、最初はジャカルタとスラバヤ出身の人々に売られた。現在、国際集団であるシェラトン・ホテル(Sheraton Hotel)グループがスングギ(Senggigi)海岸に120室のホテルを建設し、1991年3月にオープンする予定である\*\*。

ロンボクのほぼ文盲の土着の村人は、数世紀に及ぶ抑圧によって脅かされ、

チ(Kuta Beach)のように)。

### 〈環境の悪化－貧困と欲望の同居〉

過剰人口と貧困とが本来的にロンボクの環境悪化の第一義的な原因である。現在の農法に従えば、ロンボクの2400万人の内の80万人は、人口と資源の間に好ましい割合を回復させるために島を放れなければならないであろう、と見積られている。すでに、ササク(Sasak)の人々は、人口のプレッシャーと伐採業者、切り落し(slash)・焼き畑農業者、および薪拾いによる森林の伐採による農地の悪化のために、移住を余儀なくさせられている。マレーシアでは、仕事を捜している不法スレスレの移民の多くが、ササクの人々である。最近、過積載の航海用でないボートがひっくり返って、きわめて多数の移民が溺死したことは、絶望的な求職の需要を示しているのである。

ササクの人々は、伝統的には農民であり、商業と漁業を、沿岸のブギス(Bugis)・バヨ(Bajo)、マカッサレス(Makassarese)の人々に任ずるのが常であった。今や、彼らは、沿岸地方へ移動することを余儀なくされた。彼らは海の人間ではないので、大部分のササクの漁民は、張り出しげた付きのカヌー、小さな網、手釣り糸、そして原始的な水中鏡を使いながら、岩礁で漁をする。彼らは珊瑚礁を爆破して、魚を浮かすことも覚えた。この環境破壊的な方法は、単なる爆発を起こすためには大した技術を必要としないし、かつ爆弾は浜辺から投げることができるのでボートは必要とされないから、よく利用されているものである。

ギリ(Gili)三島の漁民は、サンゴの発破は、それが観光業に損害を与えるし、また観光に損害を与えることによって自分自身の生活に損害を与えることになるから、してはならないといわれていた。ここでの基本的な想定は、観光はすべての人々にとってのより良い生活をもたらすというものであった。しかし、ロンボクの過去の経験は、次第にそうではないと判明しつつある。ギリでは、

人々が、観光業の発展によって無理矢理周辺に追いやられ(marginalization)、一層の環境破壊が引き起こされた。漁民は、移住の脅威にさらされ、観光業に投資を行った人々をねたまながら、否定的なメッセージを發し、かつ有名な青珊瑚礁(blue coral reef)での漁を強化する道を選んだのである。

北西のセンギギ地方と南西のスコトン(Sekotong)地方では、移住した数人の土着漁民が、切り落し・焼き畑農業のために、保護森林に手を付けた。ここでは、観光産業の発展によって大量に生み出された欲望が貧困によって引き起こされた環境破壊を倍加させている。NGOの調査団は、村長がセカロー(sekaroh)森林で、不法伐採と切り落し・焼き畑農業を推奨していることを發見した。村長は、このようにして、伐採された土地を外部の投資者へ売却し、またはその売却を容易にしたのである。

### <根本的な道筋>

・土地の割合に比べた悲惨な住民の数と、農業及び漁業技術についての熟練度や知識が低いことが合わせ原因となって、土地利用が結局集約的なものにされ、また漁業が岩礁へと集中させられる結果となっている。

・観光業が自動的に人々の利益になるであろうという見解は誤解である。観光業の発展は、人々が単に召使としてだけでなく、決定者や企業者として関係させられるようになり、また発展が、固有の文化的、自然的環境から展開する場合には、人々の福利のためになるであろう。

・観光業を推奨する政府の任務は、観光の世話をし、またその土地固有の發意と企業を支援し、守るための人々の熟練度を發展させていくことを伴っていないなければならない。このように、自分自身とその環境について、人々が認識を高めて行くことによって、文化と自然を保持することが可能になっていくであろう。

### <敵対的な乗っ取り>

観光産業は、ロンボクの地域社会の文化と人々の性質のすべての局面を、観光客の好みに合うように次第に商業化させていっている。ロンボクの人々は、ロンボクの外部から引き入れられた労働者のために移住させられた。ますます虚弱になっていく地域社会の真ん中に、国際化された富のポケットが芽を出しつつあるし、ジャカルタ人やスラバヤ人、そしてシェラトン(Sheraton)のような多国籍企業と共にビジネスをする隔離された都市のエリートを潜伏させつつあるのである。

観光産業は、ロンボクを敵対的に乗っ取るものとなっているのである。そこでは、以前の経営者と労働者はくびにさせられ、生産は新しいブランド商品を加工するよう転換させられた。ロンボクの人々は、観光業により周辺に追いやられ、その故に彼らの限られた資源をさらに収奪するように駆り立てられているのである。

### <含意するもの>

ロンボクは、西インドネシアと東インドネシアの間では、そして異常な開発と人間中心の開発の間の闘いが行われているところでは、開発の最前線である。この争いの結果は、ロンボクだけでなく、将来の開発の形式を決定付けることになるかもしれない。観光業は、既にフローレス(Flores)島、つまりサブ(Sabu)島、アロー(Alor)島、マルク(Maluku)群島、そしてイリアン・ジャヤ(Irian Jaya)にまで及んでいる。これらの東の諸島の社会は、NGO、議会、国際的な監視者から離れているために、収奪を受け易いのである。加えて、これらの島は、倫理、種族、境界、地域自治のために、開発の包括的プランを提示する際の困難性を持っている。したがって、ロンボクで起こっている

特殊な形態の異常な開発は中止され、オールタナティブなモデルが確立されることが決定的に重要である。

### ＜異常な開発を迎え討つ場合の NGO の果たし得る役割＞

地方の NGO は、既に、ロンボクにおける人間中心の開発のための運動の前面に立っている。これら NGO の同盟は、その努力を次のことによって強化することが可能であろう。

- ・オールタナティブな地域社会の発展モデルを構想し、発案を行うこと。地域社会に基礎を置いた環境保護と文化——および自然——を志向した観光業とを結合すること。こうすれば、観光業は人々を移住させるより、人々に関わることによって積極的な何かに転換させられうる。

- ・農村及び漁村地域社会、主だった政府要人およびその機関、また旅行者に快く助力してもらえようキャンペーンの努力に取り組むこと。

- ・人々が土地を保有し、自らの事業を始め、大きな投資者に対して抵抗するための組織化を行う努力を励まし、支えること。ロンボクでは、既に必要な調査を行い、法的な面の力の進展を手伝う NGO の「準法律家的な」ネットワークによって支えられる法的扶助機関を組織するために、1つの努力が進行中である。

- ・潜在的な、そして訪れている旅行者にこの状況を伝えること。良心的な旅行の倫理は、1991年のインドネシア訪問年の基本的な一部でなければならない。旅行者は、人々に助力を与え、人々の苦難を支援する選択をなしうる理解をするようにされねばならない。

- ・たとえロンボクは、すでに防御不可能だとしても、こういった努力を続けること。ロンボクの教訓は、残りの東インドネシアにも適用することができる。

## <ケース・スタディ#5 海からの追い出し>

世界市場における石油価格の大暴落以来、インドネシア政府は、他の商品の輸出を促進してきた。こうして、漁業部門は、上位5つの輸出部門の1つとなり、1987年<sup>(1)</sup>の石油以外の輸出の5%に及んでいる。えびとまぐろは、他のいくつかの商業魚と共に、第一位の商品である。

政府は、公開で、外国およびインドネシアの投資者をこの部門に招いた（ジャカルタ・ポスト (Jakarta Post)、1989年8月11日）。日本は、最大の共同事業数を持ち、これに台湾、合衆国、オーストラリア<sup>(2)</sup>、そして今ではヨーロッパ経済共同体(EEC)の加盟国がこれに続いている。世界銀行、アジア開発銀行、そして世界農業機構(FAO)も政府の漁業プロジェクトへの技術・財政援助を提供している<sup>(3)</sup>。

えびの生産は、主にトロール船の活動と塩水の海老養殖池(タンバク (tambak))によるものである。一般には、トロール船は深い水域で操業することを許されるが、えび資源は比較的浅い水域の中で最も豊富なのである。不幸なことに、比較的浅い水域にトロール船が入らないようにするための監視活動は行われていない。

## <トロール船の影響>

監視活動の弱さまたは不存在のために、トロール船は、地方の人々が依拠している伝統的な漁業基盤となっている資源を枯渇させつつある。ジャワ、スマトラそしてカリマンタンの地方の漁民は、多くの抗議を発している。1974年には、東ジャワのムンチャール(Muncar)の怒った漁民の群衆が動力付きの船をすべて破壊し、焼き払った。北スマトラのバガン・アサハン(Bagan Asahan)で

は、漁民がトロール船を捕えて、乗組員を殺し、その体を海の中へ投げ落として、船に火を付けた。この人々達は、後に地方当局により逮捕されたが、彼らの地元の村では、ヒーロー扱いされている<sup>(4)</sup>。

かくして、1980年には、政府は、トロール船の活動を禁止した(大統領令39号)。しかし、東インドネシアについて、特にマルクとイリアン・ジャヤの間のアラフラ海については——ここではえびの資源が非常に多く、漁民の数と収獲のレベルが低いのだが——例外とされた。現在、637かそれ以上の外国所有のトロール船——それらのほとんどは日本と台湾を基地とする——が、インドネシアで活動している(インドネシアン・オブザーバー(Indonesian Observer)、1990年1月2日)。マルク、イリアン・ジャヤ、ジャワ、そしてスラウェシに基地を置くいくつかの本国の漁船隊も、アラフラ海で集中的に漁業の操業を行っている。

政府は、東インドネシアにおける漁業資源は、現在の水準での開発が可能であると予測するが、それはどのような信用できる研究によっても、支持されていない。事実、トロール船、特にえび業者の活動は、漁業資源と、トロール船が行うのと同じ海で作業を行う職人的な漁師の生活とに予想もし得ない影響を与えた。

事実、トロール船の影響の活動は、環境に大きな影響を与えている。第一に、彼らは、全季節を通じて、繁殖期の間すら、えびを捕獲することによって乱獲を行っている。彼らの細かな網は、幼魚や幼えびを含めたすべてのものを捕えてしまう。第二に、トロール船の網は、浅瀬にいる魚や他の海洋生物を破壊することになる。第三に、海に投棄された死魚——えびのトロール船の活動による副産物——から、汚染がもたらされる。捕えられたえび1トン当りにつき、魚3トンが海へ投げ返されている可能性がある。現在の調査によれば、副産物は、全収獲の80%~90%にのぼることもあり得るとされている。規則によれば、トロール船の乗員は、副産物をそぎ落とすために、トロール網の口にフィルターを用いることが要求されているが、大部分の乗員は、フィルターにかかった魚が網にえびが入るのを邪魔するという理由で、法を無視することがし

ばしばである。

西インドネシアでトロール網が禁止されているという事実は、海洋資源の乱獲の歯止めになっていない。そこで使われている近代的きんちゃく網は、時としてトロール網と同様に破壊的なものである。1988年に、300人の漁民がスマトラの東ビンタン(East Bintan)の地区長(District Head)に対し、抗議を行った。その理由は、ブルナツィカ・ミンナ・ヌサンタラ(Bernazika Minna Nusantara)の船が、彼らの伝統的な漁場で漁業をおこなっていたというものであった(ジャヤカルタ(Jayakarta)、1989年1月17日)。この台湾の会社の活動は合法であるが、しかし不適切なものであったことが判明した。ジャカルタの水産省(director general of fisheries)は、操業許可証を発行していたが、明らかに、現地のデータを調べることはしていない。

西ジャワのパマヤンサリ(Pamayangsari)では、トロール船に苦情を申し立てた漁民がなおも自らの漁場で操業している。約40のトロール船が職人的な漁民と競争した。以前は、彼らは、1日に20kgの魚を捕ることができた。現在では、職人的な漁民は、1日に10kgしか捕ることができなくなった(ピキラン・ラクヤット(Pikiran Rakyat)、1990年3月6日)。

西インドネシアで操業中のトロール船の他のケースも報告されている。マラッカ海峡に面した漁村のブルク・スイ・トゥアン(Percut Sei Tuan)の小規模漁民によれば、1988年1月には、トロール船がなおこの地域で操業中であった。トロール船は、禁止されているタイガー・ネットをこれまた非常に効率的で同じように不可逆的な環境影響<sup>(5)</sup>を持つトリ・ネット(tri-nets)網に取り替えた。1987年には、ランブン(Lampung)出身の漁民が古いものに良く似た変形タイガー・ネットの使用に対して抗議した(コンパス(Kompas)、1987年10月20日)。西カリマンタンのシボロガ(Sibolga)では、トロール船は、1987年の初めになおタイガー・ネットを使用していた(コンパス、1987年2月23日、3月30日)。

えびの取引は、1987年には漁業部門<sup>(2)</sup>の最大の外貨の稼ぎ手として、2億2600万米ドルにのぼっているが、その環境面での関わりはもっと大きいのであ

る。トロールの禁止に引き続いて、生産を補うために、卵の孵化資源を用いる多くのタンバクが創設された。

長い間、タンバクは、自然資源に依存する伝統的な技術の利用の発展に努めてきた。

### <タンバクの影響>

これまでの近代的なタンバクは、東スマトラだけで、3万2千haのマングロームブの破壊を引き起こしてきた。ジャワの北海岸のほぼ全域には、かつてマングロームブ林が並んでいたが、今はタンバクが並んでいる<sup>(6)</sup>。加えて、森林が取り去られた場合には、海岸の浸食が増大する。西ジャワのカラン・スラン(Karang Serang)では、300人の人々が新しいタンバクによる海岸の浸食のために移住しなければならなかった(ヌラチャ(Neraca)、1989年3月20日)。新しいタンバクもまた、えびやその他のマングロームブに依存する他の海洋生物に脅威を与えている。これは、孵化資源を用いる近代的なタンバク養殖にとっては問題はないが、マングロームブの破壊は、自然資源に依存する伝統的なえび池の漁民の資源の基礎を破壊するものなのである。特に、地方の女性達は、マングロームブに依存する。引潮の間は、彼らは、マングロームブの地域から家族のタンバク質の供給のために、かにや軟体動物を捕るのである。

この問題に対応して、ボゴール(Bogor)とジャカルタ出身の50人の大学生が、マングロームブの破壊に対して抗議を行うためにハシュルル・ハラハップ(Hasjrul Harahap)林業大臣を訪れた。大臣は、監視が御粗末であったことを詫び、この地域で新しいタンバクを開く許可をこれ以上与えない約束をした(ネラカ、1989年3月13日)。

しかし、現存するタンバクの拡大は、奨励されている。銀行は、タンバクの漁民に対して貸付を行っているが、多くの伝統的な漁民が欠いている土地所有の厳格な許可証を要求している。ある富裕な漁民のグループは、父から息子へ

と伝統的に継承された池のほとんどを買取してしまった。今や、本来の漁民の多くは、彼らがかつて所有したタンバクで労働者として働いている。さらに、これらの大規模な活動は、海岸の生態系を汚染する農薬と化学肥料を用いることしばしばである。

### 〈まぐろ漁業の影響〉

数種のまぐろは、主に日本・米国・EECの加盟国へ輸出するための第一級の商品である。いくつかのインドネシア＝ノルウェーの合弁事業もこの事業に投資している。

彼らの関心事の一つは、イリアン・ジャヤの首都であるジャヤブラ (Jayapura) の缶詰め工場を建設する計画を立てているティコン・ビグ (Tycon Bygg) A / S と株式会社メルデカ (Merdeka) である。彼らは、全投資額1400万米ドルをもって、1万トンのまぐろの缶詰と5千5百トンの魚肉および切身を年々生産する計画を立てている (インドネシアン・オブザーバー、1989年6月28日)。別の漁業会社の株式会社イノー・マリーン (Inor Marine) は、マルク・スラウェシ (Maluku Sulawesi) 海で収穫し、のちにインド洋つまりジャワ南部とスマトラにこれらを拡張していくであろう。この会社も、南西スラウェシのクンダリ (Kendari) に冷凍貯蔵工場を建て、港から日本に向けてまぐろを輸出している。ノルウェーの企業のノルフィコ (Norfico) とジャヤンティ (Jayanti) グループの間の合弁企業は、マルク海で漁業を行う計画を立てている (コンパス、1990年2月26日)。他方において、ニュージーランドの会社も、スマトラ沖のニヤス (Nias) 島のダラム (Dalam) 湾でまぐろ捕獲のための基地の建設に関心を示している (インドネシアン・オブザーバー、1989年6月28日)。

イリアン・ジャヤ海の周辺では、数社がまぐろ漁を行っていることが知られている。フランスの会社である株式会社マルチ・トランスペッシェ (Multi Transpeche) が、ビアク＝ヌムフォール (Biak-Numfoor) 島の周辺で、漁業権を

取得した。日本の会社と共同する2つの他の会社が、現在、アラフラ海のイリアン・ジャヤの北西海岸沖のソロン(Sorong)の近くで漁業を行っている。インドネシアの国営企業のウサ・ミナ(Usah Mina)社も、イリアン・ジャヤ海で、まぐろをとっている。いくつかの他の会社が、違法・合法にこれらの海の周辺でまぐろをとっていることを疑う証拠がある。

民衆と環境へのまぐろ漁の影響は、漁に日常用いられている技術によって変わる。かりに、釣針やさおといった技術が用いられる場合、その影響は、アンチョビー(anchovies)とそれを捕るものにも及ぶ。アンチョビーは、まぐろのえさとして、漁船に対してまぐろの群れを引きつけるために用いられる。えさは、ふつうバガン(bagang)(固定または浮遊の持ち上げ式の網の伝統的な仕掛)によって捕られ、ブギス(Bugis)とマカサレス(Makasarese)の漁民によって用いられている。細い迷い網(maze net)は、アンチョビー以外のあらゆる大きさの魚をとる際にも用いられる。したがって、まぐろのえさの需要が上昇するにつれて、バガンの数も上昇する。バガンの増大は、逆にまぐろ産業への依存性を増している職人的な漁民の生活に影響を与えると共に、漁業資源を枯渇させる可能性がある。

まぐろ漁船団が刺し網(gill net)を用いる場合には、次々と、いるか、おっとせいその他の種が網に掛かって死ぬ。しばしばこの巨大な網の一部が裂けて飛び、何年間も動物を捕え、殺し続けるゴースト・ネット(ghost net)になる。

いずれの技術にしても、タンパク質の必要性を確保するための獲物に依存する土着の漁民——ジャヤプラとその先でマグロを売買するスラウェシ出身の移住漁民も同様だが——は、大きな獲物と大きな利益を取り込む投資家によって周辺に追いやられるだろう。

漁業産業は、地方の住民にとっての仕事の機会を作るという議論もよく吟味しなければならないものだ。1988年には、ピアク(Biak)の女性達がピアク地区の労働事務所でデモンストレーションを行ったが、その理由は、ある会社が

工場労働者として、地域の労働者よりもジャワ人を雇用しているというものであった（カバール・ダリ・カンブン(Kabar Dari Kampung)、1988年6月）。

<結論>

魚の輸出を中心としていくことは、現在の政府の政策に反映されており、衰えを見せないとと思われる。したがって、私たちは、将来的には、漁民の幸せと海の環境の条件がただ悪くなっていくだけであろうと考える。この傾向を転換し、または少なくとも緩和することは、研究基金の欠如、専門的知識の欠如、また外国と自国の会社による海の侵奪から海を守る能力、および／または意欲の低さのもとでは、困難なことである。職人的な漁民も、彼らが領有する正当な漁業水域も、漁業産業の創出に向かうこういった傾向の矢面に立つことになろう。

<執筆者注>

- (1) *International Monetary Fund, April 3, 1987, Indonesia-Recent Economic Developments. Washington, D.C.: IMF, pp. 54-56.*
- (2) *Irwan, Alexander, March 1988. "The small-scale Fisherpeople and Traditional Shrimp Farmers in Indonesia: Two Losers of the Rapidly Increasing Export of Shrimp. Paper Presented at the International NGO Forum on Indonesia Conference. April 25-28, 1988, Netherlands.*
- (3) *Bailey, Conner, 1986, "Government Protection of Traditional Resource Use Rights- The Case of Indonesian Fisheries," in David C. Korten (ed), Community Management: Asian Experience and Perspective, Irwan, 1988.*
- (4) *Betke, Friedhelm, 1985, "Modernization and Socio-economic Change in the Coastal Marine Fisheries of Java: Some Hypotheses, "Sociology of Development Research Centre, University of Bielefeld, Faculty of Sociology, Working Papers No.72, in Irwan,1988.*

- (5) *Yosuke, Fuke, 1987, "Indonesia: Fat Prawns for Japan, Slim Pickings for the Fisherpeople," AMPO 18 (4), in Irwan, 1988.*
- (6) *Hinrichsen, Don, 1990. "Coastal People on the Edge of Survival," People 17 (1): 26- 28.*

## ＜# 6 汚染されたアジクワ (Ajikwa) 川：多国籍鉱山の遺産＞

食べること、洗うこと、飲むこと、旅行すること、儀式を行うこと—インドネシアの生活の基本は河川の回りで行われる。しかし、水はもはやこれらの基本的ニーズを満たしていない。今や水は、工業、取引、観光、都市化、そしてその他の近代的機構の中で、重要な役割を果たしている。異なった水の利用は、一つの流域内では、両立しうるものではないことがしばしばである。不完全な計画の開発プロジェクトは、インドネシア中の川を汚染し、人々をその生命線から遠ざけることを常としている。

1987年12月には、アメリカの多国籍企業の、フリーポート＝マクモラン (Freeport-McMoran) 鉱山会社は、銅と金の1億トンの埋蔵を発見し、これは南太平洋において最も重要なものの一つで、南イリアン・ジャヤのグラベルグ (Graberg) の現存する鉱山の近くにあると発表した。この新しい採掘源は、フリーポートの埋蔵と年間生産高の両方を三倍化しうるものであった。

1990年3月初めには、インドネシア政府は、フリーポートがインドネシアの海外投資規制に従うなら、新しい採掘源を発掘するフリーポートの活動を歓迎するとのニュースが報ぜられた。この拡張は、現在のインフラストラクチャーを拡張するための20億米ドルの投資にのぼり、アジクワ川の支流に敷地を準備し、溶解炉を設置し、小さな発電所を建てるものである、といわれた。フリーポートにとっては、この投資を調達することは簡単であった。その露天堀の鉱山は、世界で最も低コストの鉱山に位置している。

しかし、環境コストの評価は、もっとむずかしいものである。フリーポート・イ

インドネシアが1972年に操業を始めた時、インドネシアは、なおその環境保護規制を定めていなかった。その時以来、フリーポートは、その遠い場所の故に政府やNGOの監視を免れてきた。たとえ、フリーポートの環境面の行ないにもっと関心が持たれたにしても、この会社は、その1万km<sup>2</sup>の採掘地に対するアクセスを厳しくコントロールする。たとえば、飛行機の滞在客は、有刺鉄線の壁、二重ドア、守衛からなる地方空港の構内から出ることにはできない。しかし、17年前の操業以来、フリーポートは、無処理の銅鉱滓を、その工場からアジクワ川の第二支流へと継続的に投棄していた。この有毒な汚染の川の生態系や地方住民の健康への影響は、まだ記録にはされていない。

しかし私達は、熱帯アジア=太平洋地域における他の銅山の例から推し計ることはできよう。日本の足尾銅山が操業を中止してから80年後、表面近くで採取された土のサンプルが、6種の重金属の残存を示した<sup>(1)</sup>。1979年には、比較的初期に開発され、採掘された銅山がなお香港の川の流域を汚染していた<sup>(2)</sup>。東マレーシアのキナブル(Kinabulu)山の川への銅の集中的流入は、飲料水の世界保健機構(WHO)の基準を33%上回っている<sup>(2)</sup>。パプア・ニューギニアのブーゲンビル(Bougainville)島では、銅山の残滓が川に住む魚をすべて殺し、また生産を開始する前から河口を塞いでしまった。8つの土着の村が移転を余儀なくされた<sup>(3)</sup>。14のフィリピンの川は、銅銅山の廃棄物によりひどく汚染されている。廃棄物が海に入ったところでは、海産物の減少が50%にも上った<sup>(4)</sup>。

フリーポートの影響が深刻でなく、長期にわたるものでないと信じる根拠はない。事実、アジクワ川の銅滓汚染についての関心は、フリーポート労働組合長で、のちに解雇されるソニー・スンコウォ(Sonny Sungkowo)によって、早くも1981年には喚起されている。YPMDイリアンジャヤという地方のNGOも、アムン=メ(Amung-me)——銅銅山地域の高地の先住民の慣習上の土地所有者——の現在の状況についての1984年の調査の中で河川の汚染を記している。アジクワの生態にとっての示唆の他に、これが、沿岸のマングローブ

林から赤道の氷河に広がるローレンツ自然保護公園 (Lorenz Nature Reserve) にとって何を意味するか。フリーポートはこの公園に境界を接し、一旦この会社がその活動を広げれば、その保護に抵触することになるかもしれない。

当然のことながら、河川汚染は、その生命線がアジクワ川にある土着の地域社会を崩壊させた。新しいフリーポートの仮設滑走路であるティミカ (Timika) の地域医療センターで働くある医者は、地域の人々の間で、歯茎の変色を認めた。医者は、研究を行えるようになる前に移動してしまっただが、恐らく確かな手がかりを得たと思われる。汚染された河川から20年間にわたり魚をとり、水を飲んだことから生ずる健康の問題が生ずるのは避けがたい。

地域経済の中心が、1960年代にオモウカ (Omowka) からアマナパレ (Amanapare) のフリーポート港へと移って以来、ミミカ\*\*\*\* (Mimika) の人々の生活は急激に変化した。以前は、原始的な輸送手段は、地方で作られた丸木舟によっていた。今日、カヌー工業は衰退し、地方の人々は、港へ、また港から、高地へ行くのにほとんど道路に頼っている。地方住民の収入レベルは、フリーポートの存在により上昇しているとフリーポートの支配人は主張して、もっともらしく反論しているが、イリアン・ジャヤにおける唯一のスラム街は、会社の敷地のまさに外側に見られるのであり、そこには、富の分け前に期待する地方のイリアン人が集まっているのである。金銭経済の導入と繁栄の約束は、アムン＝メとミミカの生活の質を低下させるのに役立っているのみのように思われる。

この問題の解決のための一つの案は、アムン＝メ高地の住民をティミカ\*\*\*\* (Timika) 低地へ移住させることである。しかし、YPMDの次のような主張にもかかわらず、彼らの将来の水供給をきれいにするために何ら真剣な努力はなされていない。すなわち、「移住は、……河川と地下水のこれ以上の汚染をきれいにし、かつ制御することがなければ……理想的な選択とはいえない」と。

批判や人口・環境省からの圧力に答えて、フリーポートは、環境影響評価

(EIA)を行う地方の科学者を雇い入れた。彼らは、地域調査のためにフリーポートと川の水の標本を分析するためにフリーポートの実験室を使いながら、驚くべき短時間で調査を終了した。それにもかかわらず、イリアン・ジャヤの環境保護局は、フリーポートを、州の中ではEIAを使った最初の投資者の一人である、と賞賛した。EIAの調査結果については、何らの言及もなされていない。

イリアン・ジャヤ州知事のバス・スエブ(Bas Suebu)は、フリーポートの上首尾に満足していると述べたものの、なお次のように感じていると述べた。「最も必要とされているのは、この州の……人種的に様々で、かつしばしば原始的な住民を考慮に入れる中小規模のプロジェクトである。鉱山の敷地の再生利用と結合したアジクワ川の清浄化計画がそのようなプロジェクトになるかもしれない。それは、採掘地の中やその周囲の何百、あるいは何千もの人々に関係し、地下の採掘へと労働者を誘うよりもずっと彼らにとって健康的なものになるかもしれないのである。」

西ジャワのセムビランガン(Sembilangan)村周辺の水は、1つの皮革工場と2つの製紙工場とによって汚染されている。その水は、汚い黒に変色した。えび漁によって生活を立てている500人の村民は、彼らの1日の収入が1万ルピア(6米ドル)から、3千ルピア(1.7米ドル)へと減少したと報告している。水が飲料に適さないため、住民は、水を買うために限られた収入の多くを使っている。いまだに、川で水浴びをしている何人かの人々は、皮膚の発疹と疥癬の被害を受けている。1986年の環境影響報告によれば、製紙工場の1つは、廃棄物処理施設を建てざるを得なくなった。しかし、川の状況からすると、処理施設は、政府視察の間にしか使われなかった可能性がある。

北スマトラのアチェ(Ache)では、何千という魚やえびが主な化学肥料工場を源とするアンモニア汚染によって死滅させられていた。この地域を訪れた水産庁の役人が500haの養殖池が汚染されたと発表した。近くの村では、池のえびが死滅させられた。

インドネシアの環境問題についての若干の紹介 (3) (神戸 秀彦)

ジャカルタに比較的近いところでは、チビノン(Cibinon)で、62の工場が織物から電気製品用の接着剤に至るまでの様々な生産物を作り、その廃棄物をチリウン(Ciliwung)川に捨てている。川の水は、悪臭を放ち、魚は死に、水の中で泳ぐ人々は皮膚がひりひりしたと報告している。ジャカルタの800万住民は、チリウン川の下流水がもはや人間の消費に適さないので、今や飲み水については上流水に頼っている。

都市及び工業汚染の重大さを知って、人口・環境省大臣のエミール・サリム(Emil Salim)博士は、いくつかの他の省とNGOとの協力で河川の浄化計画に着手した。カリ・ベルシー(Kali Bersih)計画は、汚染河川からの有害排出物を停止するために、地方政府と工業資本家とを協力させることを目的とする。不法投棄者についての罰則の概略を定める法律は、1990年1月に発効した。

カリ・ベルシー計画に含まれる20の河川の1つに、東ジャワのブランタス(Brantas)川がある。州政府は、最近、この川の工業汚染は、水質処理施設の取り付けによってかなり減少させられた、と報告している。以前は、汚染のレベルは毎年上昇していた。

カリ・ベルシー計画は、インドネシアの川を人々に戻すために将来的に有望な第一歩である。しかし、計画は、ジャワ中心というインドネシア共通の問題を反映している。修復の必要が認められた20の河川のうち、1つを除く全てがジャワとスマトラにある。問題は、他の島々にも存在するにもかかわらず、である。

アジクワ川はこの計画には含まれていない。それは、恐らくフリーポートがジャカルタの役人から遠いため、十分に監視を受けないで済んだためである。

(続く)

<執筆注>

- (1) *Fred G. Notehelfer, Japan's First Pollution Incident, pp. 351 - 384, and Alan Stone, The Japanese Muckrackers, pp. 385 - 408, both in The Journal of Japanese Studies 1 (Spring 1975), as well as Margaret McKean, Pollution and Policymaking, in T.J. Pempel(ed), Policymaking in Contemporary Japan, Ithaca: Cornell University Press, 1977.*
- (2) *Kogai, Newsletter from Polluted Japan, No.22, Report of the First Regional NGOs Seminar on Asian Environment in Tokyo, October 1979.*
- (3) *Richard Jackson, OK Tedi: The Pot of Gold, Port Moresby: University of Papua, New, Guinea.*
- (4) *Richard West, Rivers of Tears: The Rise of the Rio Tinto-Zinc Mining Corporation, London: Earth Island Limited, 1972.*

<訳者注>

- \* 今回も、インドネシアの地名等の日本語発音表記につき福島大学教育学部の木村純一氏のご教示をえた。
- \*\* このレポートが書かれたのは、90年3月である。
- \*\*\* イスラム教徒の義務「五柱」の第5番目に挙げられているメッカ巡礼を行った者、および彼らに与えられる称号（石井米雄監修「インドネシアの事典」〔同朋舎〕、328ページ）である。
- \*\*\*\* 同一地名だろうと推測されるが、ミミカ(Mimika)か、ティミカ(Timika)かは訳者にはわからなかった。